

練習問題

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 日がまったく没して、世界は青くなった。最初に久助君のなみだが切れたので泣きやんだ。すると加市君、兵太郎君、徳一君という、泣きだしとは逆の順で、せみが鳴きやむように泣きやんでいった。

そのとき太郎左衛門がこう言った。

「ぼくの親戚が大野にあるからね、そこへ行こう。そして電車で送ってもらおう」

② どんな小さな希望でもすがりつきたいときだったので、みんなはすぐ立ち上がった。しかしそれを言ったのが、ほかならぬ太郎左衛門であることを思うと、みんなはまた力がぬけるのを覚えたのである。もしこれが、だれかほかの者が言ったなら、どんなにみんなは勇気をふるい起こしたことだろう。

やがて、大野の町に入ったとき、みんなは不安でたまらなくなったので、

「ほんとけ、太郎左衛門？」

と何度も聞いた。そのたびに太郎左衛門は、ほんとうだよ、と答えるのであった。が、いくらそんな答えを得てもみんなは信じることはできなかった。

④ 久助君も太郎左衛門をもはや信じなかった。——こいつはわけのわからぬやつなのだ、みんなとは物の考え方がまるでちがう、別の人間なのだ、と思いつながら、みんなに立ち混じっている太郎左衛門の横顔をするどく見ていた。すると、太郎左衛門の横顔は、そっくりきつねのように見えるのであった。

町の中央あたりまで来ると太郎左衛門は、「ううんと、ここだったけな」

などと独り言しながら、あっちの細道をのぞいたり、こっちの路地にはいったりした。それを見るとほかの四人はますますたよりなさを感じ始めた。また太郎左衛門のうそなのだ。いよいよ絶望なのだ。

しかし間もなく太郎左衛門は、一つの路地からかけ出して来ると、「見つかったから、来いよ、来いよ」

とみんなをまねいたのである。

⑤ みんなの顔に、暗くてよくは見えなくつても、さアつと生気の流れたのがわかった。足が棒のようになっていたのも忘れて、みんなはそっちへ走った。

いちばんあとからついて行きながら、久助君は、だが待てよ、と心の中で言った。あまり有頂天になると、幸福ににげられるという気がしたからであった。なにしろ相手は太郎左衛門なのだから、真に受けることはできないはずだ。

そう考えると、また今度もうそのように久助君には思えるのであった。そして久助君は、時計をならべた明るい小さい店の所に来るまで、太郎左衛門を疑っていた。しかしそこはほんとうに太郎左衛門の親戚の家だった！

太郎左衛門からわけを聞いておどろいたお婆さんが、

「まあ、あんたたちは……まあまあ！」

とあきれてみんなを見わたしたとき、久助君は救われた、と思った。すると急に足から力がぬけて、へたへたとしきいの上に座ってしまったのであった。

(新美南吉『嘘』)

問一 —— 線①「日がまったく没して、世界は青くなった」とは、どの

ような情景を表現していますか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 人の姿がまったく見えないほど暗くなっている情景。

イ 人の姿がぼんやりとしか見えないくらい暗くなっている情景。

ウ 空一面に星がきらきらと輝^{かがや}いている情景。

エ 夕焼けが空をおおっている情景。

問二 ―― 線② 「どんな小さな希望でもすがりつきたい」とありますが、

みんなは、なぜこのような気持ちになったのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 疲れはてたうえ日も暮れ、不安になって途方^{とほう}にくれていたから。

イ 歩きすぎて、もう一歩も歩けないほど疲れきってしまったから。

ウ 遅^{おそ}くなったのを両親にしかられるのが怖^{こわ}くて、家には帰れなかったから。

エ いくら探しても太郎左衛門の親戚の家が見つからず、不安になっていたから。

問三 ―― 線③ 「それを言ったのが……覚えたのである」とありますが、

このことからどんなことがわかりますか。

問四 ―― 線④ 「久助君も太郎左衛門をもはや信じなかった」とありますが、

久助君は、太郎左衛門をどう思ったのですか。思った内容を文中から探し、その初めと終わりの五字を書き抜きなさい。

初め

--	--	--	--	--

終わり

--	--	--	--	--

問五 ―― 線⑤ 「みんなの顔に……さアつと生気の流れたのがわかった」

とありますが、みんなが元気づいたのはなぜですか。

問六 次のア～エは、文中の久助君の太郎左衛門に対する気持ちについて述べたものです。久助君の気持ちの変化にしたがって並べかえ、

記号で答えなさい。

ア 救われたと思いつつも、なお用心深く疑っている。

イ たよりなさに、絶望を感じはじめている。

ウ もう決して信じまいと、強い不信感をいだいている。

エ 本当に信じられるのかなと、少し不安を感じている。

問七 ―― 線⑥ 「すると急に足から力がぬけて、へたへたとしきいの上に座ってしまった」とありますが、なぜこのようになったのですか。

その理由を書きなさい。

問八 久助君をはじめみんなは、太郎左衛門のことをどういう人間だと思っていましたか。ひらがな四字で書きなさい。

--	--	--	--	--

■ 総合問題 (3)

得点

100点

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

①「……君、とび下りるの?」

「とび下りるんだったら、どうする?」

からかうような声で、しかし山口のその語尾の余韻は、彼が本気のを語っていた。彼はぼくを見つめた。

とび下りるつもりなんだ、山口は、とぼくは思った。

ぼくは困惑した。

「……しかたないだろう。ぼくは、どうもしないよ」

やがて、ぼくは真面目にそう答えた。そのとき山口はぼくにとって、牛肉屋の店先に吊された赤い肉塊のような物質、ぼくにどうすることもできない、「他人」の一人でしかなかった。いくらとめようとしたって、と

めることはできない。下手をすればぼくまでいっしょに墜落する。……

ぼくは思った。死んだり生きたりは彼の自由なので、お節介にぼくが容喙する余地はないのだ。ぼくがすべての能力をあげても、結局は山口という他人は、それが他人である以上、どうすることもできない。

ぼくが彼を、彼と二人きりでの隠密な関係を、そのときの連帯をかりに愛しているとしても、要するにそれはぼくの勝手だろう。山口の生き

たり死んだり、つまり彼の自由でしかないのだ。

「ねえ。とび下りるなら、とび下りたって、いいんだよ」

くそ真面目にぼくはもう一度、そう彼にいった。山口は、頬にこわばった微笑をつくりつけて、その微笑は、すでにぼくの手のとどくものではなかった。ぼくは、ぼくの理解を絶する彼の家の「方針」を思い出した。きつとそれなりの理由があるのと同じように、いくらぼくにわけが

5

わからなくても、彼には彼の理由があるだろう。だから、もし彼がどうしてもとび下りたいのだったら、ぼくにはそれをとめる能力も資格もない。彼が突き落してくれといっても、ぼくにはそれを扶けて突きとばしてやるだけの理由も必要もないのと同じように。……ぼくにできることは、山口の邪魔をしてやらないこと、それ一つだ。生きるなり、死ぬなり、彼の勝手を、そうして尊重してやることだけだ。

べつに、彼の自殺が恐かったのではない。くどくどと思いつづけながら、突然、それは無関係な、全身のひきしまるようなある理解がきた。そうだ。孤独とは、だれも手を下して自分を殺してはくれないということの認識ではないのか。……そして、ぼくはぼくの孤独だけを感じた。

そのとき、やっとぼくに恐怖がきた。それは山口という一人の他人には無縁な、ぼくだけの恐怖だった。いわばぼく自身の生命を、最後までぼく一人の手で始末せねばならないという、冷厳で絶対的な人間のさだめへの恐怖だった。

——十分とも、三十分とも思える時間が過ぎ、その間、ぼくらは無言で化石したみたいに煙突の上を動かなかった。やがて、ぼくがそろそろと腰をずらせ、山口がすぐそれにつづいた。

指が凍え、硬直して、しかもその指で鉄梯子をつかむと、まるで氷の棒をじかにつかむように、鉄棒はさらにつめたく冷えきっているのだ。……

屋上に着いたぼくらは、おたがいに笑いの消えた顔で、いいあわせたように首を上げ、いま下りてきたばかりの煙突を仰いだ。

煙突は、白黒に塗り分けられた姿のまま、不透明に白濁した冬の寒空

のなかに、いつものとおりただ茫洋*3 ぼうようと無感動にそびえていた。

(山川方夫『煙突』
やまかわまさお)

*1 容喙 〓 余計な口出しをすること。

*2 彼の家の「方針」 〓 山口の家は比較的裕福ひかく ゆうふくであるが、家を建てるために、家族全員が昼食を食べないことにしている。

*3 茫洋 〓 広すぎて見当のつかないさま。

問一 〓 線ア 〓 ウの漢字の読みをひらがなで書きなさい。(5点×3)

ア			
イ			
ウ			

問二 〓 線①「君、とび下りるの？」とありますが、二人はどこにいるのですか。文中から四字で書き抜きなさい。(10点)

--	--	--	--

問三 〓 線②「他人」のここでの意味として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。(15点)

ア たがいの気持ちを推察し合わない、かわりの薄い相手。

イ たがいの自由に干渉かんじょうすることのない、また干渉できない相手。

ウ たがいのことをよく知らないし、知ろうともしない相手。

エ たがいに関心を持たない、どうでもよい相手。

--	--

問四 〓 線③「その微笑は、すでにぼくの手のとどくものではなかった」とは、どんなことを表していますか。三十字以内で書きなさい。

(20点)

問五 〓 線④「それ」の指す内容として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。(15点)

ア 自分には山口をとめる能力も資格もないこと。

イ 山口が今まざにとび下りようとしていること。

ウ 自分には山口の勝手を尊重してやることしかできないという思い。

エ 山口が自殺するのではないかと恐れる気持ち。

--	--

問六 〓 線⑤「いま下りてきたばかりの煙突を仰いだ」ときの「ぼく」の心情を次のようにまとめました。□A 〓 Cにあてはまる言葉

を書きなさい。ただし、Aは「責任」という言葉を使って二十五字以内にまとめ、B、Cは漢字二字の言葉をそれぞれ文中から書き抜きなさい。(A 15点 B・C 各10点)

自分の生命に対しては□A という□B と□C をかみしめている。

A

B

--	--

C

--	--